

春風の吹く町

小川未明

青空文庫

金^{きん}さんは、幼^{おきな}い時^じ分^{ぶん}から、親^{おやかた}方^{かた}に育^{そだ}てられて、両^{りょう}親^{しん}を知^し
 りませんでした。らんの花^{はな}の香^かる南^{みなみ}の支^し那^なの町^{まち}を、歩^{ある}きまわつて、
 日^{にっ}本^{ぽん}へ渡^{わた}つてきたのは、十二、三のころでした。街^{まち}はずれの空^あ
 き地^ちで、黒^{くろ}い支^し那^な服^{ふく}を着^きた親^{おやかた}方^{かた}は、太^{ふと}い鉄^{てつ}棒^{ぼう}をぶんぶんと振^ふ
 りまわしたり、それを空^{そら}へ高^{たか}く投^なげ上^あげて、上^{じょう}手^ずに受^うけ取^とつた
 り、また、片^{かた}方^{ほう}の茶^{ちや}わんに隠^{かく}した、赤^{あか}や白^{しろ}の玉^{たま}を、別^{べつ}の茶^{ちや}わん
 へかけ声^{こゑ}一つでうつしたりして、群^{むら}がる人^{ひと}たちにみせていました。
 また、金^{きん}さんは、でんぐり返^{かえ}りをしたり、逆^{さか}立^だちをしながらか、茶^{ちや}
 わんの中^{なか}の水^{みず}を飲^のんでみせたのでした。親^{おやかた}方^{かた}は、日^{にっ}本^{ぽん}はいい
 ところだといっていました。

ある日のこと、急に気分が悪いつて、親方は宿へ帰ると
床につきました。金さんは、どんなに心細く感じたでしょう。
お薬を買いにいたり、氷で頭を冷やしたりして、小さい子供の
力で、できるだけ看病をしました。親方は、しわの寄った
目じりに、涙をためて、

「おまえのことは、さつき、よく宿の人に頼んでおいた。日本
の人は、困ったものを見殺しにしない。私が、もし死んだら、お
まえは、正直に働いて、日本を自分の生まれた国と思つて、
永く暮らすがいい。」と、いい聞かせました。

金さんは、その後、遺言を守つて、本屋の小僧さんとなり、
よく辛棒をしました。そして、一人まえになつてから、小さな

店みせを持ったのであります。金きんさんは、親おやかた方も、自分じぶんのように、
 両りょうしん親しんがなく一人ひとりぼっちだったこと、気き短みじかで、しかられると
 きは怖こわかったが、人情にんじょうぶか深い、いい人ひとだったことなど、思おもい出だ
 しました。金きんさんは、お仏ぶつだん壇だんに親おやかた方の写しゃしん真まを祭まつって、命めい
 日ちには、かならず燈あかり火あを上げあげて拜おがんだのです。
 町まちの子供こどもたちが、店てんとう頭なららに並なべておく絵本えほんや、雑誌ざっしをひろげて
 見みても、金きんさんは、小言こごとをいいまませせんんででした。子供こどもたちが笑わらうと、
 自分じぶんも笑わらって見みていいました。子供こどもたちが帰かえると、またきれいに、
 本ほんを並ならべ直なおしたのです。毎まい日にちのようように店みせへ遊あそびびにくる子供こどもの中なか
 に、良りょうちゃんといいって、ようすの貧ますしげしげな子供こどもがありました。そ
 の子こは、いいつも金きん太た郎らうさんさんの絵本えほんを、きまつつて手てに取とり上あげて、

飽きもせずながめていました。そして、くまとお相撲を取るところへくると、うれしそうな顔つきをして、笑いました。

ほかの子供は、本を見てしまうと、そこへ投げ出していつてしまふけれど、良ちゃんだけは、ちやんともとのところへ置いて帰りました。

「おれにも、あんな子供の時分があつたのだ。」と、考えると、金さんの目には、人通りのほげしい、油のこげつく臭いが漂う、狭い夕日の当たる町の景色が浮かんでくるのです。足が疲れて歩けないのを、親方が手を引いてくれて、一軒の食べ物屋へ入りました。そこで鶏の肉のご飯を食べた。そのうまかつたのが、いまだに忘れられないのでした。

金さんが、正直で、いい人なものだから、店には、いつもお客がありました。故郷の人とも友だちができれば、また学生さんにも友だちができました。お嫁さんをもらえとすすめる人があるけれど、金さんは、まだ早いといって、一人で暮らしていました。金さんは、独りで、考えているのが好きなのです。

「おじさん、金太郎さんの本は、もうなくなつたの？」

ある日、良ちゃんが、聞きました。どこか本の下になつたのでしよう。

「ありませんか。」と、金さんは、下りて、さがしてやりました。

「僕、昨夜、金太郎さんの夢を見たから、飛んできたんだよ。」

と、良ちゃんは、一人でした。

「そんなに金太郎さん好きですか。あなたにあげましょう。」
と、金さんは、古い絵本を良ちゃんに与えました。良ちゃんは、
おどり上がるようにして、喜んで帰りました。

良ちゃんの家は、病氣のお父さんと、働きに出かけるお母さん
とでありました。良ちゃんは、一冊の本も容易に買ってもらえ
なかつたのです。

その日の晩でありました。仕事から帰つたお母さんが、良ちゃん
をつれて本屋さんへやつてきました。良ちゃんの顔には、泣い
たあとがあつて、昼間与えた絵本を抱いています。

「この子が、ご本をもらったといつて持つてきましたが、ほん
うでしようか？」

「ほんとうです。金太郎きんたろうさんが、お好きすのようですから、あげたのです。」と、金さんきんは、笑わらって答こたえました。

「ありがとうございます。それなら、いいですけれど。」と、お母さんかあは、喜よろこんで、お礼れいをいって、帰かえりました。後あとからついていく良ちゃんりようの顔かおも、いきいきとしていました。

金さんきんは、かぜをひいて臥ねました。店みせも半はん分ぶん閉しめてあります。いちばん心しん配ぱいしたのは毎まい日にち遊あそびにくる子こ供どもたちでした。

「おじさん、どこがわるいの。」

「おじさん、ご用ようがあつたら、お使いつかについてあげるよ。」

いろいろと、上あがりがまちから、奥おくの方ほうをのぞいてなぐさめました。金さんきんは、うれしく思おもいました。日暮ひぐれ方がたには、良ちゃんりよう

のお母かあさんが、みまいにきました。

「私わたしには、はらんの実みがいちばんきくのですが。」と、金きんさんが、苦しくるそうに、いいました。子供こどもの時分じぶんにもはなはだしい熱ねつのとき、親おやかた方が、らんの実みを煎せんじて飲のましてくれて、なおったことを思おもい出だしたのです。

「らんの実みですか、さがしてあげますよ。」

良りようちゃんのお母かあさんは、金きんさんのために、翌よくじつ日、らんをたずねて方ほう々ぼうを歩あるいたのでした。

一ひとり人のおじいさんがあつて、らんのほかに、いろいろの薬やく草そうを作つくっていました。

「これは、去きよ年ねん生なった実みです。」と、らんの実みを分わけて

くれました。また、良ちゃんのお父さんの、胃の病氣によくきくとこの草も分けてくれました。このとき、お母さんには、おじいさんの顔が、神々しく見えたのです。そして、他人のためにしたことが、かえって自分のためになったとうれしかったのであります。

吹く春風にどこからともなく、いい花の香りが流れてきて、林の中では、小鳥が楽しそうにさえずっていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「台湾日日新報 夕刊」

1940（昭和15）年4月7日

※表題は底本では、「春風《はるかぜ》の吹《ふ》く町《まち》」
となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年3月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春風の吹く町

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>